

# 放課後デイサービス での関わり

千葉大学子どもこころの発達教育研究センター

特任研究員

臨床発達心理士・公認心理師

本郷美奈子

1. 放課後デイサービス

2. 療育型の放課後デイサービスにおける実践

3. 放課後デイサービスの  
メリットとデメリットとして考えられること

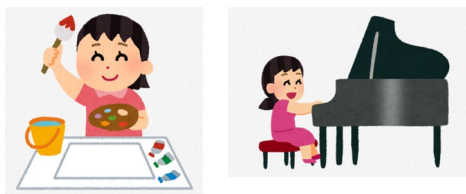
4. 今後の展望

# 放課後デイサービスとは？

- 対象者：障害のある6～18歳
- 療育手帳や障害者手帳がなくても、専門家などの意見書などを提出し放課後等デイサービスの必要が認められれば、受給者証が市区町村から発行される。この受給者証を取得することで通所の申し込みができ、1割負担でサービスを受けることができる。
- **2012年**の児童福祉法改正により設置

# 施設のタイプ

## 習い事型



## 療育型



## 学童保育型



# 療育型の放課後デイサービス

- スタッフ  
心理士・言語聴覚士・作業療法士など専門の資格をもっている人がいる施設もある
- 行動面，学習面，コミュニケーション面など様々な角度から個人に合わせた療育を実施。ソーシャルスキルトレーニングや独自の療育プログラムが組み込まれていることが多い。

**学校の補完的な場所**

# 放課後デイサービスの支援者の 理論的バックグラウンド

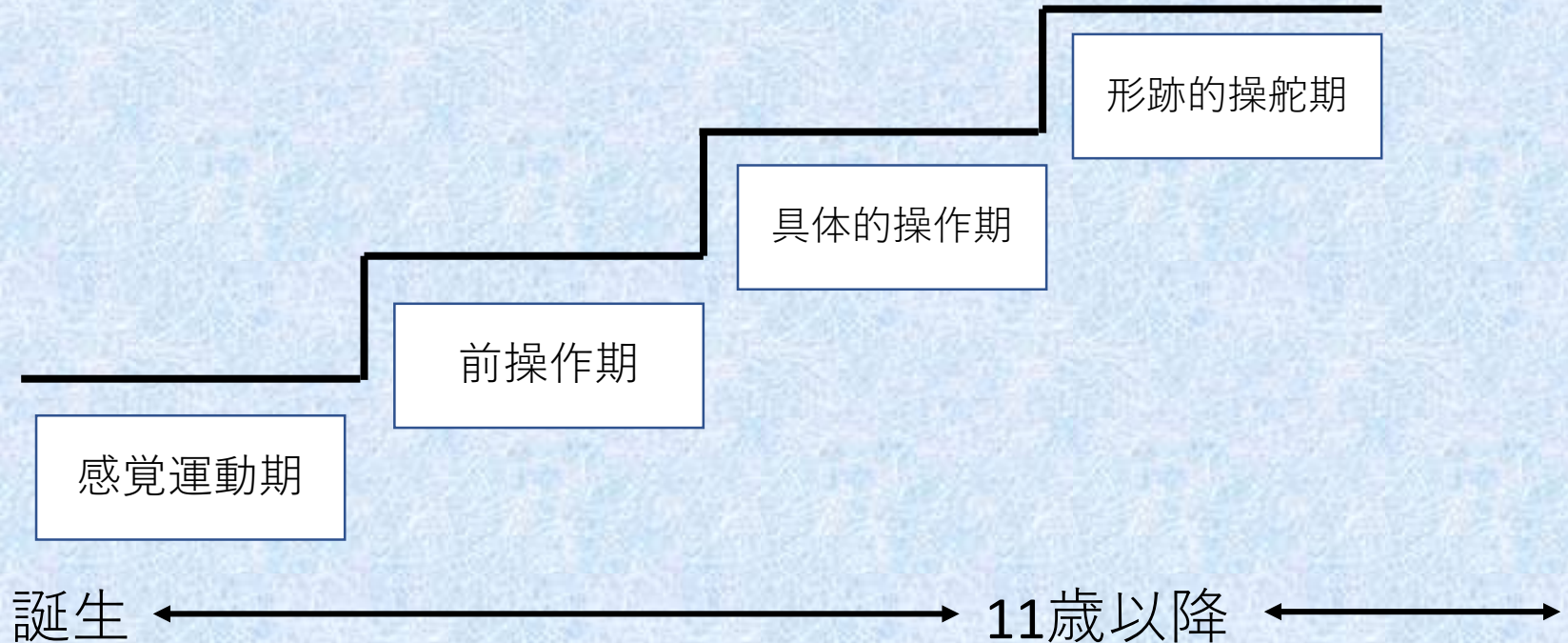
- 神経発達症の知識
- 発達心理学
  - ① 発達段階説（ピアジェ）
  - ② 発達の最近接領域（ヴィゴツキー）
- 応用行動分析

# 発達区分

発達心理学では，発達を，下記の表のような時期区分が用いられることが多い（長谷川，2019）

発達区分	おおよその時期
胎児期	—
乳児期	誕生～1，2歳
幼児期	1，2歳～6歳
児童期	6歳～12歳
青年期	12歳～22歳
成人期	20代，30代
壮年期	40代，50代
老年期	60歳以上～死

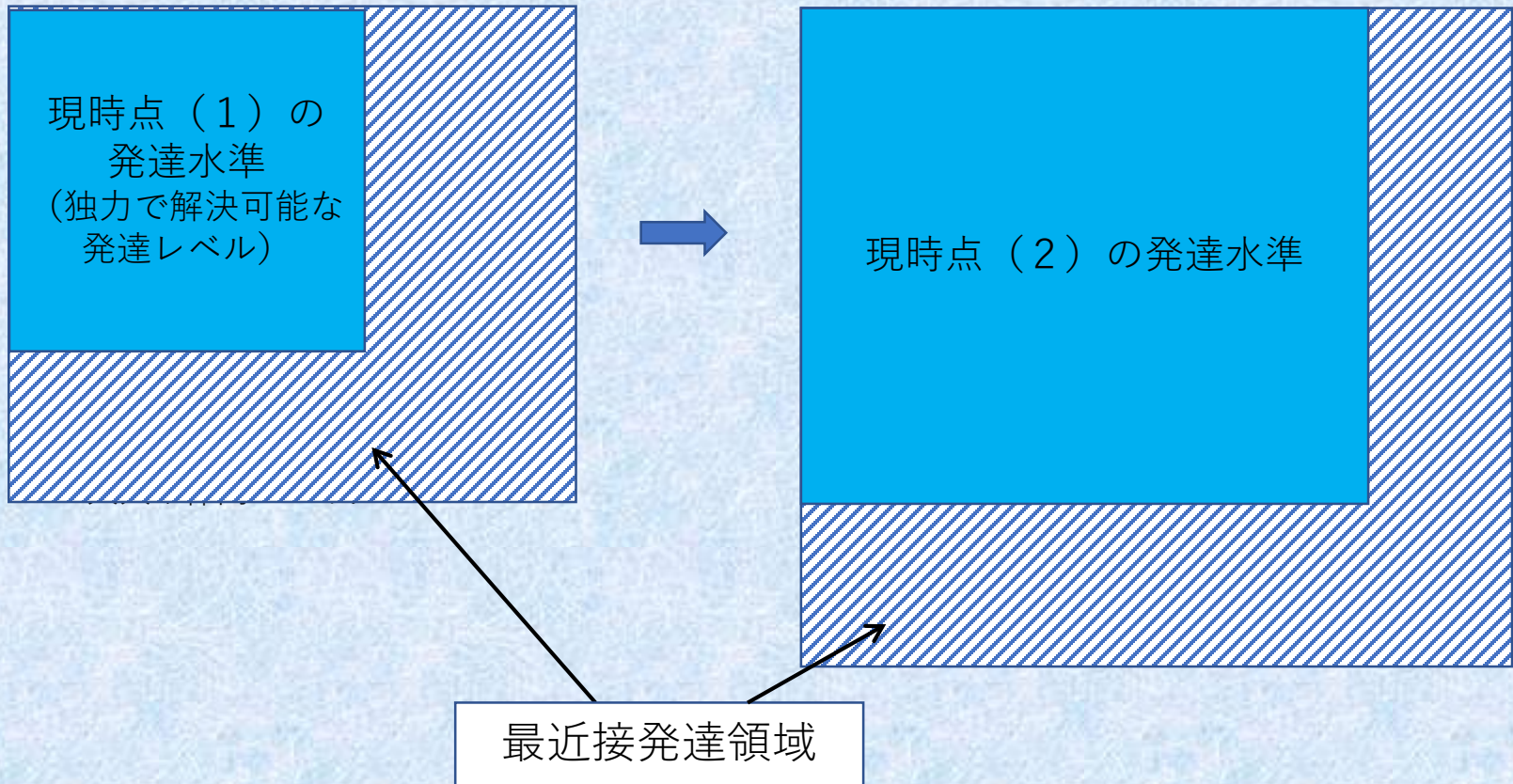
# 発達段階説



ピアジェの発達段階は、発達的変化の激しい新生児・乳児・幼児を対象。主体内の知識構造の変容過程に焦点化



# 最近接発達領域の概念図

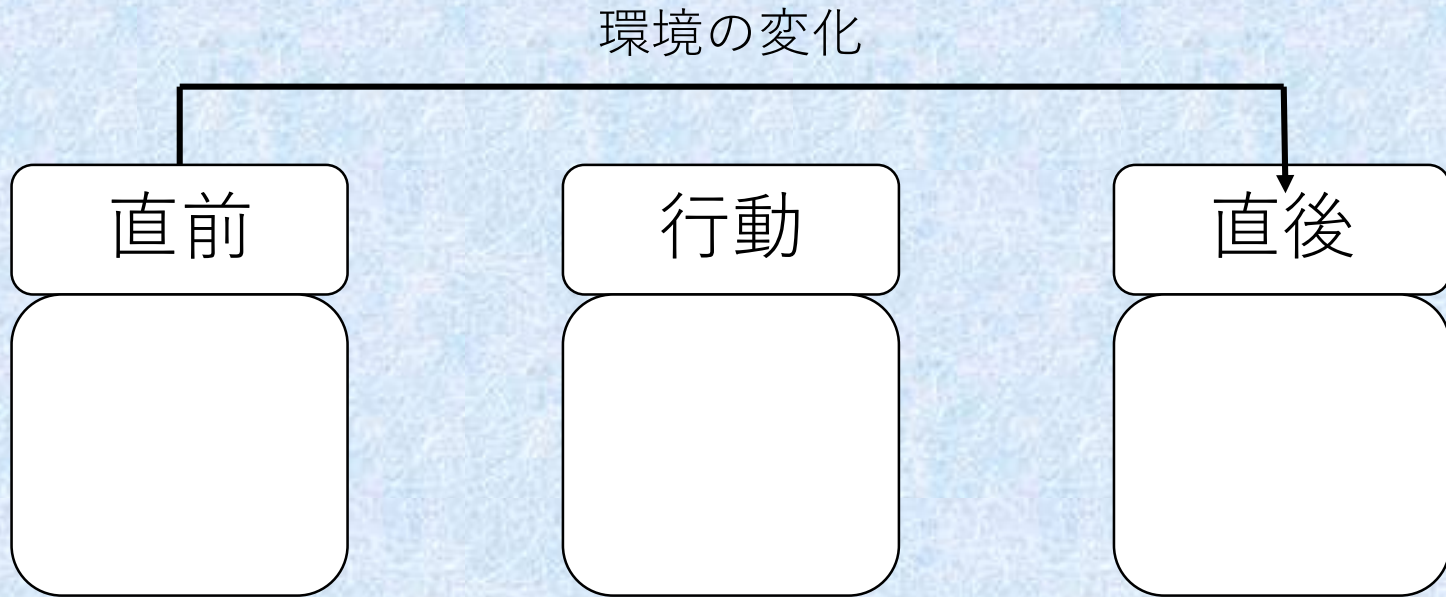


大人や仲間のガイダンス

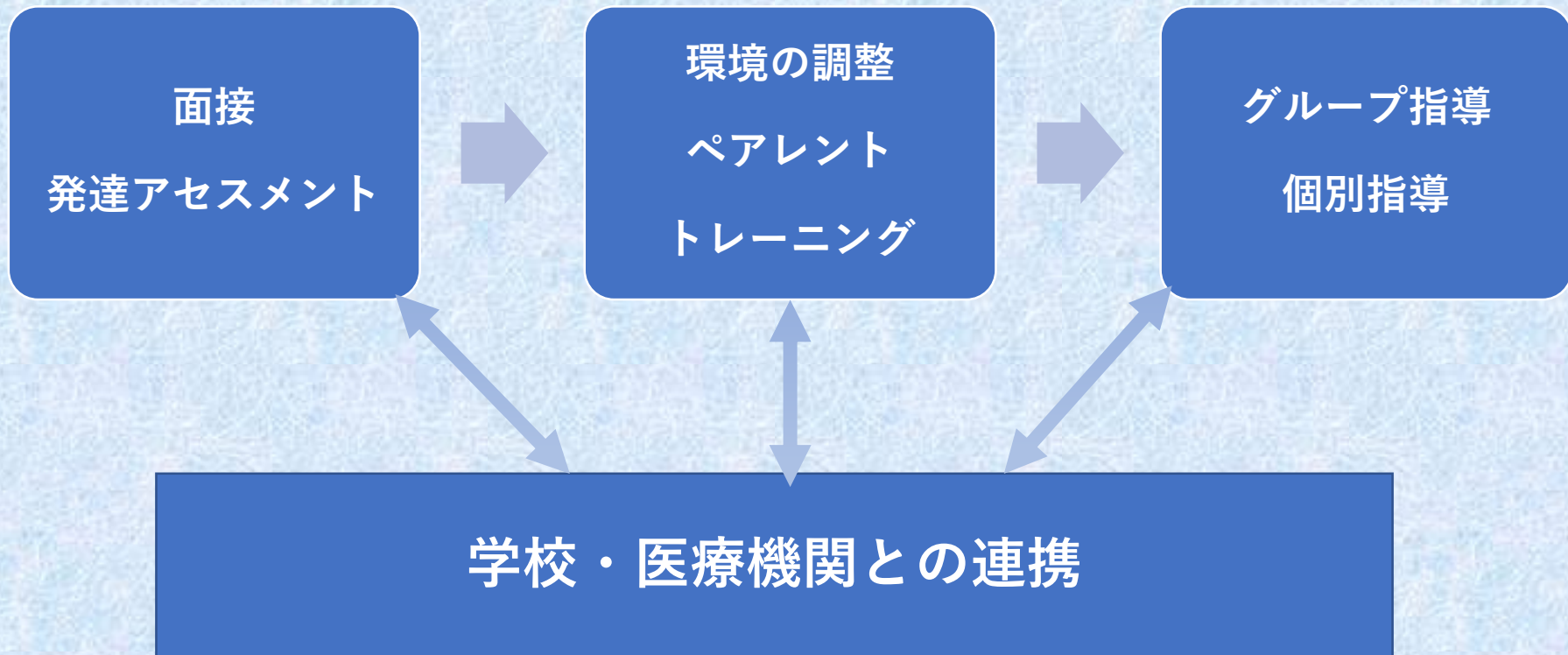
療育・教育が影響を与える領域

# 応用行動分析

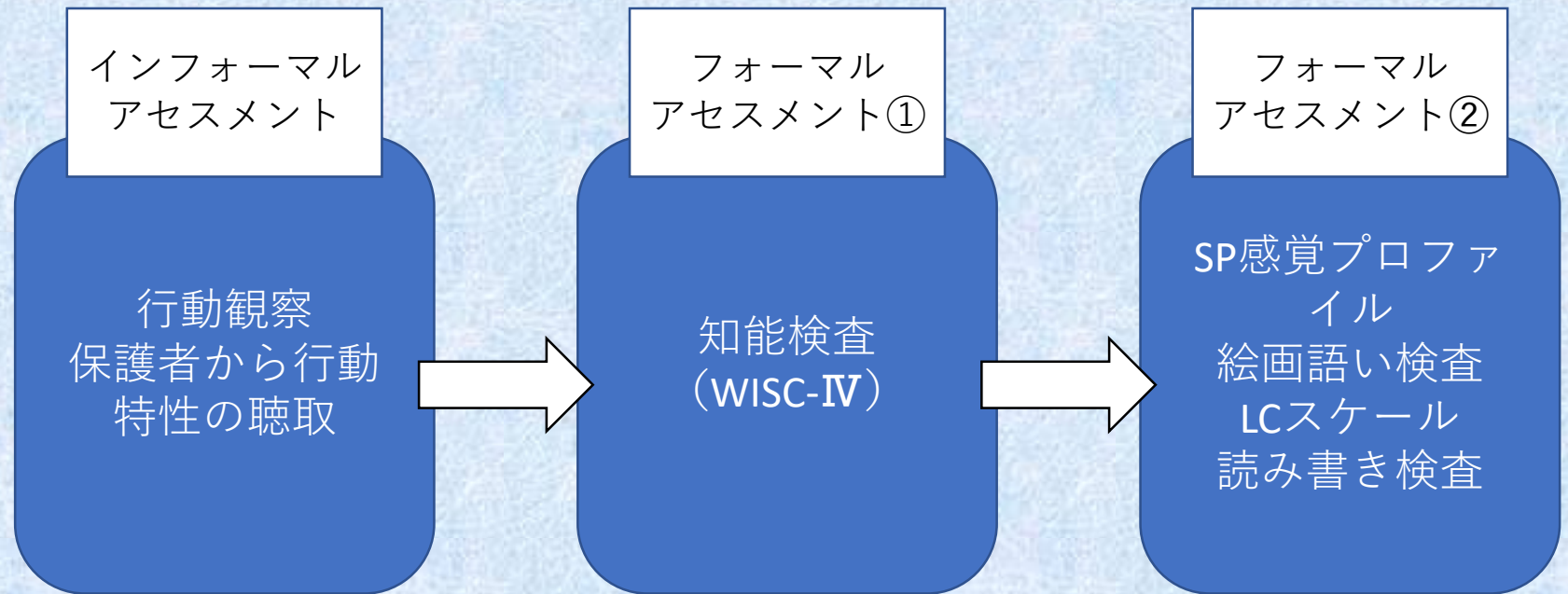
行動随伴性 行動とそれに伴う状況の変化との関係



# 療育の流れ



# 発達のアセスメント



# 環境の調整－構造化

- 「個々の子どもの自閉症 特性を理解したうえで、その子どもが理解しやすい環境を設定するための工夫」であり、個々の子どもによって配慮のあり方が異なってくるものである（E. ショプラー他，2003）。
- 「構造化による指導」は時間と空間の意味を、ASD児者に対して視覚的に理解可能な形で伝えていくための配慮や工夫でもある（米澤他，2012）。

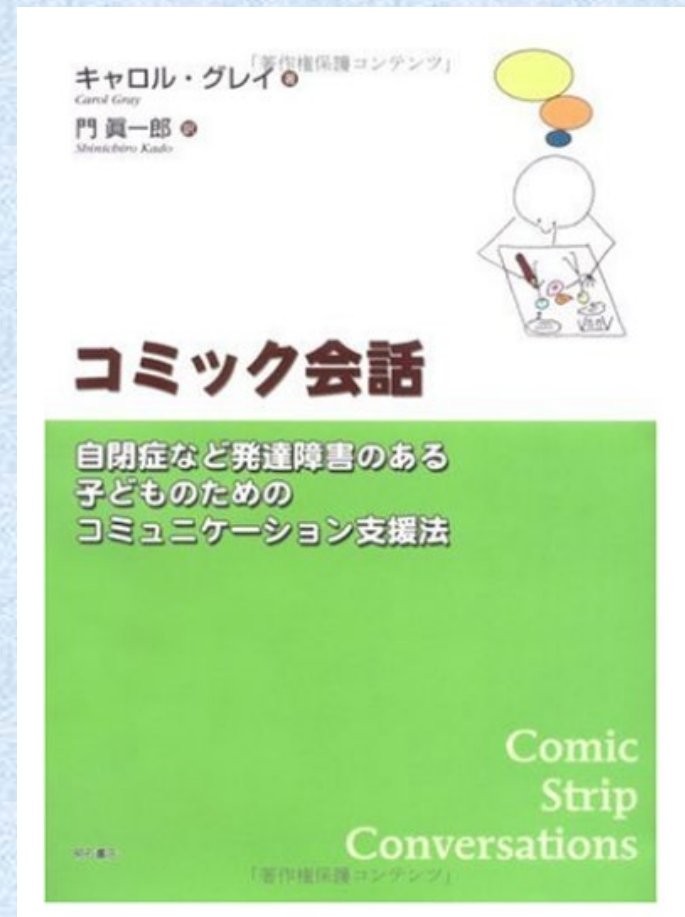
# 小集団指導・個別指導

ソーシャルスキルトレーニング  
(social skill training : SST)

- 社会的スキルの向上を目的とした介入
- 行動理論をベースに、モデリング、リハーサル、フィードバックといった諸技法から構成されている

# コミック会話 (キャロル・グレイ)

- コミック会話とは、2, 3人の会話に線画を組み込んだもの
- 絵によって補足的な支援を提供し、コミュニケーションをわかりやすくする



# ソーシャルストーリー

(キャロル・グレイ)

- ASDの大人や子どもの立場から、その状況をとらえなおし、次に見落とされがちな情報を見つけ出して共有することによって、混乱を解決しようとするもの（キャロル・グレイ、2006）





# 放課後デイサービスにおける療育的関わりのメリット

- 利用に際し，診断は必要ない
- 「特別な支援を必要とする子ども」という周囲の共通認識
- 発達アセスメントを通して，本人の状態を把握することで，本人の一部の課題が明確になる
- スキルを磨くことによって，**社会適応が促進される**

# 放課後デイサービスにおける療育的関わりのデメリット①

- 少しでも定型発達に近づきたい
- 発達促進アプローチ：ボトムアップ型



- ありのままの本人を受け止めることが不十分？
- 障害特性を積極的に尊称する機会が不十分？
- 「問題は本人」という構図
- 社会への過剰適応の助長

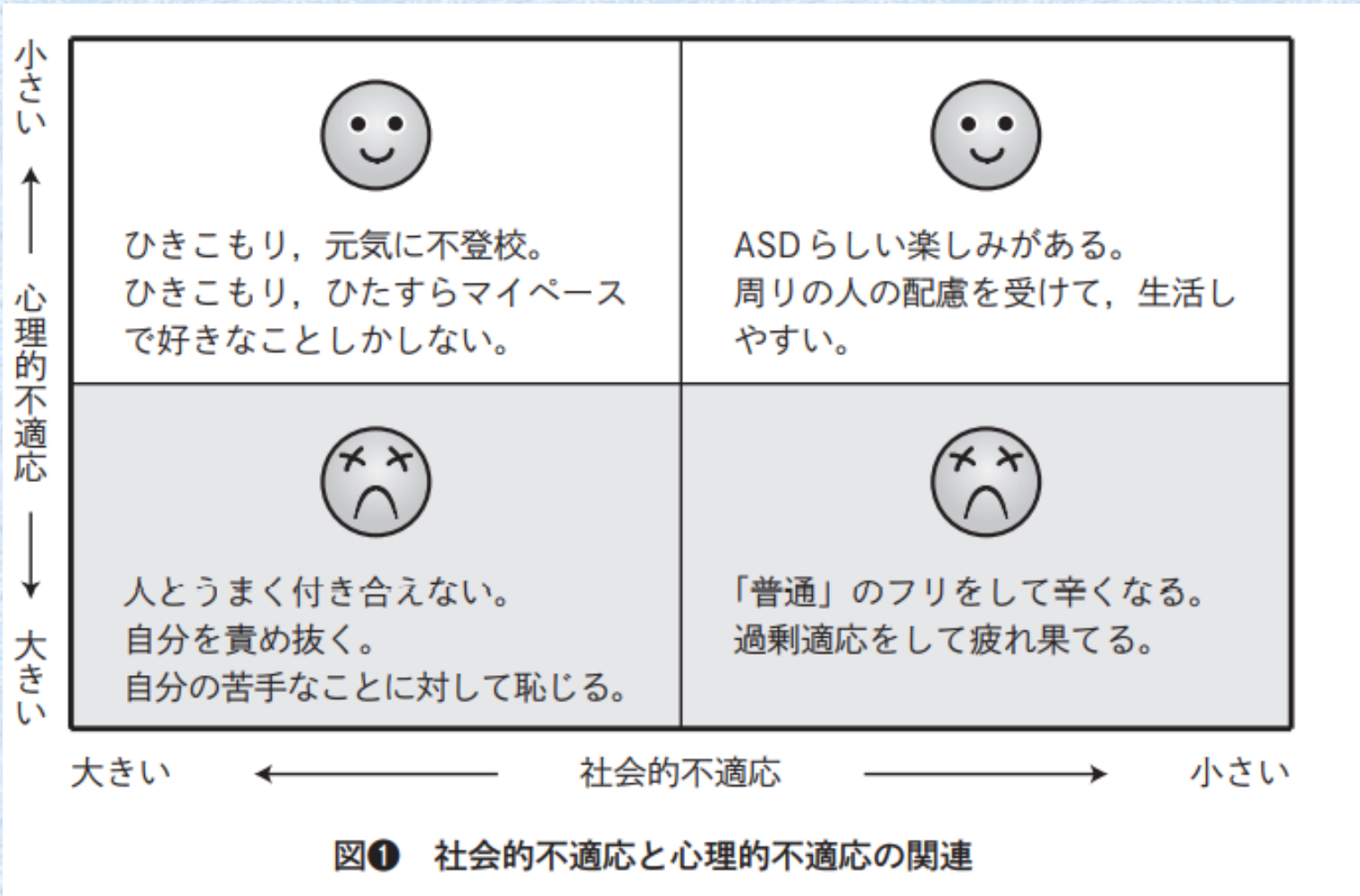
# 放課後デイサービスにおける療育的関わりのデメリット②

- 医療との連携の必要性の理解が不十分
- 支援者・保護者の診断に対するスティグマ
- 状態の把握にとどまる



- 支援者の診断に基づいた障害特性・特性の個別性の理解が不十分・場当たりの対応
- 保護者と本人への心理教育が不十分
- 本人の障害者に対するスティグマの助長・アイデンティティの問題
- 心理的不適応

# 社会的適応と心理的適応



図① 社会的不適応と心理的不適応の関連

# 「発達促進アプローチ」対して

- 完全に定型発達にはならない
- できることでできないことを補完するアプローチの認識が必要：将来を見越してそこから考えるという意味で、トップダウン的な考え方（本田）
- 得意なことを十分に保障すること

# 「診断」に対して

- 医療との連携
- 診断に基づいた障害特性の理解  
例) ASD ASD特性 (ACAT)・学習スタイル (TEACCH)
- 保護者と本人への心理教育
- 学校との連携
- ↓
- 親子の診断に対するスティグマの低減
- ASDのアイデンティティ

# 支援者の立ち位置

- 誰のサイドに立つのか？
- 何を問題とするのか？
- 神経発達症の子どもに対するスティグマは？
- 学校・社会を相対化することが必要

# 障害の考え方

- ショウガイ (impairment) をもつということは、多数派とは異なる地 (無意識の知覚運動パターン) をもつということ
- 障害 (disability) とは、自らの固有のパターンがそれに合わない環境によって乱される現象 (熊谷, 2020)



- 障害特性の理解としてのACAT (大島ら, 2020)
- 学習スタイルと環境調整